

遺族・CO裁
判、災害責任
追及、特集号

第一百四十一号

CO患者——
江崎 治己さん

○患者の江崎治己さんもまたいやぶなしに、政府から労災補償を打ち切られた一人で、押しつけられた障害等級は十二級である。

昭和八年四月二十二日生れたから四十六歳。新港作業所で働いて

「通信簿」を見よう。

「修身」優、國語「優」、國民「優」、地理「優」、算數「優」、理科「優」、体操「優」、音楽「良上」、習字「優」、図画「優」、工作「優」〔昭和二十一年三月記〕

昭和二十三年の春のこと、国民学校の高等科を卒業するとすぐ三川鉦に入社した。太平洋戦争で戦敗後の大恐慌のなか、しかも三池港事務所に勤務していた実父の稼ぎでは、四人の子ともたちに食わせていくことは容易でなく、「初めから進学の意志などまったくなかった」(江崎さんの述懐)のだった。

三十二年の秋の十月六日、彼は妻の美恵子さんと結婚した。江崎さんが二十四歳、美恵子さんが二十一歳のときのことだ、前記したようにその頃住んでいた荒尾市緑ヶ丘松町の鉾山杜宅の一隅で、新生活はスタートしていった。

月六日次男の信之君が誕生した。それは父親となった江崎さんが、説得班の一員として、組織防衛のために夜も昼もなくかけ回っているなかでのことだったのだ。

もっともその頃はすでに、家の暮らしを立てるためにはかり、採炭工として三川鉱の坑底の切羽で働いていたが……。

今は押さえのきかぬ症状に悩む日々

勞苦にくじけずささえる妻



昭和三十八年十一月九日。その日江崎さんは、二番方勤務のために出かけていた。

夫の姿にこれというほどの変りもなかったから、美恵子さんのようこびはたとえようがなかった。だが、知らぬこととはいえ、恐るべき一酸化炭素ガスの立ちこめるな

かで、仲間たちを助けるために長時間立ち働いた身で、どうしてもC O中毒症から逃れることができたろう。いや、逃れられるはずはなかった。も早やそのとき、ほかの例にもれず江崎さんもまたC O中毒症に冒されていたのである。(以上カルテから)

もうとまりません。お店が閉まる夜なかなまでコソトリつかるんですね。勝つことがあるのかないのか聞いても何にもならないから、私は聞くとも思いませんけど、それが十日間ほど続くと、あとパタッとちびんです。

医師が黙って書いて渡したのが、ほかでもなく「休業証明書」だったのである。

いる、妻の美恵子さんもううのである。

「とにかく結婚してから六年間

かえ、大牟田労災病院でリハビリテーションがスタートすると、エ

うになりました。幼い子どもを、
ぶったり蹴ったり……—

ていたことなど知るよしもなかったのである。

だが、やがて真相を伝え聞き、幼な子たちを人にあずけ組合の三川支部へかけつけた美恵子さんだつた。

騒然たるたたずまいのなかで、次つぎに死んでいった仲間たちの名まえが発表されていく。彼女はもう生きている気がしなかった。

んどはさうそくそれに参加した。もうそんな彼に、子どもも頃ひらめいていた抜群の頭脳や、弘探炭工の一人として、坑底の切羽でバリバリ働いていた以前人間の姿は見られなかった。

ついには新港作業所で水袋のフツ

美恵子さんの話は続く。